

競技場面におけるコーチング行動を改善する 包括的プログラムの提案：サッカーコーチ を対象にした探索的検討

清水, 智弘 / SHIMIZU, Tomohiro

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

118

(発行年 / Year)

2023-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第558号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2023-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(心理学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026656>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	清水 智弘
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	第812号
学位授与の日付	2023年 3月24日
学位授与の要件	本学学位規則第5条第1項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 荒井 弘和 副査 教授 島宗 理 副査（学外）筑波大学・東京成徳大学名誉教授 市村 操一

競技場面上におけるコーチング行動を改善する包括的プログラムの提案
——サッカーコーチを対象にした探索的検討——

1. はじめに

清水智弘氏提出学位請求論文「競技場面上におけるコーチング行動を改善する包括的プログラムの提案——サッカーコーチを対象にした探索的検討——」は、論文を構成する実験研究のひとつが、コーチング研究領域の専門誌である「コーチング学研究」に掲載されている。また、本論文に関連した研究成果は、日本スポーツ心理学会、日本体育・スポーツ・健康学会（旧・日本体育学会）などにおいて発表されている。本論文の一部は、本学の「法政大学大学院紀要（人文科学・社会科学系）」や「法政大学スポーツ研究センター紀要」にも掲載され公開されている。これらの研究を学位請求論文の目的に従って連ね、全体としての統一性を構築して、論述の一貫性を確保するために加筆修正したのが本論文である。本論文の構成は、以下のとおりである。

2. 論文の構成

序論

第1章 コーチングの介入プログラムに関する研究の動向

第1節 コーチングに関する介入、測定と評価の特徴

第2節 先行研究についての考察と本研究で取り組む課題

第2章 本研究の目的と意義

第1節 本研究の目的と構成

第2節 本研究の意義

本論

第3章 競技場面上におけるコーチング行動評価尺度の開発

第1節 競技場面上におけるコーチング行動評価尺度の項目作成とコーチングアウトカムの探索的検討（調査1）

第2節 競技場面上におけるコーチング行動評価尺度の開発（調査2，調査3）

第4章 競技場面上におけるコーチング行動の介入プログラム開発

第1節 競技場面におけるコーチング行動の介入プログラム検討 (実験 1)

第2節 競技場面におけるコーチング行動の介入プログラム検証 (調査 4)

第5章 競技場面におけるコーチング行動を改善する包括的プログラムの効果検証

第1節 競技場面におけるコーチング行動の包括的プログラム検証 (実験 2)

第2節 競技場面におけるコーチング行動の包括的プログラム検証 (実験 3)

結論

第6章 総合考察

第1節 本研究で得られた成果

第2節 本研究の限界と今後の展望

引用文献

本論文に関わる研究業績

3. 本研究の目的

スポーツにおいて、選手やチームの競技力を向上させるためには、コーチが行うコーチングが重要である。コーチングの第一の目的は、指導する選手やチームのパフォーマンスを高めることである。そのため、コーチを育成する際には、選手やチームのパフォーマンスを高めるコーチングを習得させる必要がある。そこで本研究の目的は、コーチを対象として、スポーツの競技場面におけるコーチング行動を改善するための包括的プログラムを開発することとした。

4. 各章の概要と評価

第1章では、コーチング行動の改善を目的とした介入プログラムを行っている先行研究を概観した。プログラムの評価については、(1) 介入プログラムの効果を評価する際、コーチング行動を評価する視点に偏りがあるため、コーチング行動を多面的に検証できていないこと、(2) 競技場面における具体的なコーチング行動を評価する尺度が存在しないことを明らかにしている。介入プログラムについては、(1) プログラムの効果について一貫した結果が得られていない、(2) コーチングが改善した研究において、その改善の要因が不明瞭である、(3) 行動的コーチング以外の研究では選手やチームのパフォーマンスの向上に焦点を当てていないと指摘している。本章では、国内外の先行研究を幅広く概観した結果として、先行研究の具体的な課題を明示している点が評価できる。

第2章では、本研究の3つの目的が提示された。具体的には、(1) 競技場面におけるコーチング行動の評価尺度を開発すること、(2) 競技場面におけるコーチング行動を改善する介入プログラムを開発すること、(3) 競技場面におけるコーチング行動を改善する包括的プログラムを開発することの3つである。3つの目的の関係性を説明すると、(1) と (2) を目的とする研究の成果に基づいて、(3) を目的とした研究の実施を目指しているといえる。本章では、先行研究を概観した結果として、合理的な目的を設定している点が評価できる。

第3章では、混合研究法（面接調査と質問紙調査）によって、競技場面におけるコーチング行動の評価尺度の開発を試みている。調査1において、コーチング経験が豊富なサッカーコーチを対象に面接調査を行い、競技場面におけるコーチング行動を明確にしている。調査2と調査3では、競技場面におけるコーチング行動の評価尺度を開発するために、調査1によって明確になったコーチング行動を調査項目として設定し、選手を対象に質問紙調査を実施している。探索的因子分析と検証的因子分析を行った結果、2因子（「インストラクション」と「セルフコントロール」）から構成される、競技場面におけ

るコーチング行動の評価尺度を開発した。そのうえで、多重指標モデルによる共分散構造分析を行った結果、2つの因子が、コーチと選手の関係性に対して正の影響を及ぼすと示され、本尺度の社会的な適切さが確認されている。本章では、コーチを対象とした丁寧な面接調査の結果に基づいて、具体的なコーチング行動を評価する尺度を開発しただけでなく、その尺度の妥当性と信頼性も担保している点が評価できる。

第4章では、実験1において、行動的コーチングに基づく介入プログラムを実施し、競技場面におけるコーチング行動が改善されてゆく過程を検討している。コーチング経験が豊富なサッカーコーチ1名を対象に、パフォーマンス向上の文脈で重要なコーチング行動である「インストラクション」と「フィードバック」を標的行動として設定したうえで、介入を行っている。その結果、増やすべき行動である「具体的かつ端的なインストラクション」と「具体的かつ端的なフィードバック」が増加し、減らすべき行動である「抽象的または冗長なインストラクション」は減少しており、期待どおりの行動変容を確認している。この実験の後に、調査4として、介入プログラムの課題を詳細に検討している。研究対象であったコーチが、選手を励ますコーチング行動に結果価値を持ち、選手の意欲向上などを結果予期として持っていることを示している。本章では、行動分析学の主要な研究方法であるシングルケースデザイン法を用いて介入の効果を検証している点、および、コーチ育成の専門家による評価やコーチへの聞き取り調査などを行うことによって、社会的妥当性を確認している点が望ましいと考えられる。

第5章では、本論文の中心的な章といえる。第3章で開発した競技場面におけるコーチング行動評価尺度を用い、第4章で実施した介入プログラムの内容とその課題を踏まえて、包括的なプログラムを構成し、その効果を検討している（実験2、実験3）。実験2ではコーチング経験の少ないサッカーコーチを対象に、実験3ではコーチング経験の豊富なサッカーコーチを対象に、包括的プログラムを実施した。その際、（1）コーチング行動の観察、（2）コーチによるコーチング行動の自己評価、（3）選手によるコーチング行動の評価によって、包括的プログラムの効果を検証した。結果として、実験2では、標的行動であった「具体的かつ端的なインストラクション」と「具体的かつ端的なフィードバック」がわずかながら増加していた。一方、実験3では「具体的かつ端的なインストラクション」の生起頻度が、実験2よりも高い水準まで増加した。実験2も実験3も選手による評価は向上しておらず、全ての点において期待された結果が得られたわけではないが、第3章と第4章の成果を元にして、多面的な評価に基づくより洗練されたプログラムを実践している点が評価できる。

第6章では、本研究における2つの成果を論じている。1つめは、競技場面におけるコーチング行動を改善する包括的プログラムを実践し、その効果を確認したことである。本研究で実施された包括的プログラムには改善の余地があるものの、コーチング経験が豊富なコーチを対象とした場合に一定の効果をもたらすと期待できる。2つめは、競技場面におけるコーチング行動を明らかにしたことである。具体的には、コーチング行動の因子として、選手に分かりやすくコーチングする行動である「インストラクション」と、感情を制御しながらコーチングする「セルフコントロール」という2つを明示した。いくつかの課題は残るものの、本研究で開発したコーチング行動の評価尺度は、コーチ育成やコーチングの実践において役立つと考えられる。以上2点を成果として掲げることは妥当と評価できる。

最後に、今後取り組むべき3つの課題が示されている。それらは、（1）介入プログラムを改善し、介入の効果と再現性を高めること、（2）パフォーマンスを評価するための指標の設定、（3）研究成果の汎用性を高めることである。以上3点は、本研究の結びにおいて提示すべき課題として適切と考えられる。

5. 本研究の総合評価

以下、本研究について法政大学大学院人文科学研究科心理学専攻における論文評価基準に従って、評価する。

(1) タイトルの適切さ

本論文のタイトル「競技場におけるコーチング行動を改善する包括的プログラムの提案——サッカーコーチを対象にした探索的検討——」は、本研究の目的を的確に表現している。

(2) 問題の適切さ

スポーツ指導における暴力問題などを受けて、日本体育協会（現・日本スポーツ協会）が内容を取りまとめて、2016年3月に発表された「モデル・コア・カリキュラム」のポリシーに沿って、本研究は行われている。日本スポーツ協会（旧・日本体育協会）は、2019年4月から、モデル・コア・カリキュラムに基づいて、公認スポーツ指導者制度を改定した。それに先立つこと1年、2018年4月に本研究は着手された。つまり本研究は、スポーツ界に対する社会的要請に応える研究であるだけでなく、スポーツ界の変容を先導している先進的な研究であるといえる。

(3) 研究方法の適切さ

競技場におけるコーチング行動の評価尺度の開発においては、様々な属性のコーチを対象とした面接調査を丁寧に行い、コーチが行っている具体的なコーチング行動を収集している。そのうえで、それらを項目として設定し、心理統計学的に妥当な評価尺度を開発している。介入プログラムの開発においては、行動分析学の主要な研究方法であるシングルケースデザイン法を採用し、様々な側面から評価を行っている。対象者の個別性に配慮したプログラムの開発を模索する中で、次第にプログラムの各要素を洗練させてゆき、評価尺度も組み込みながら、最終的には一定の効果を導くことが期待できる包括的プログラムの開発に成功している。

(4) データ分析方法の適切さ

質的なデータについては、KJ法やStep for Coding & Theorization (SCAT)といった分析方法を用いている。量的なデータについては、目視分析によって丁寧にデータを確認することに加えて、検証的因子分析や多重指標モデルを用いた共分散構造分析といった比較的高度な分析方法も採用している。これらの分析方法は、研究の目的に応じて適切な手法が選択されており、十分に評価できる。

(5) 図表表現の完成度の高さ

適切な形式を採用して理解しやすく記載された図表が多いものの、キャプションと図表の内容が一致していない箇所や冗長な記述があり、また、即座の理解が困難な図表が認められるため、修正を施すべきである。

(6) 考察における文献の検討と問題との対応

本研究が最初に示した問題に対して、4つの調査と3つの実験を行い、その結果に関連する先行研究を概観し、それらの知見を踏まえて、多面的な考察を行っている点は評価できる。

(7) 論文の独創性

競技場面に統制困難な変数が数多く存在することが、コーチング研究を行う際の障壁となっている。この点を解消するために、3つの実験ではシングルケースデザイン法を採用して、コーチング行動の変容を検証している。このように、心理学の立場から研究を行うことによって、スポーツ技術の研究が中心であったわが国のコーチング研究に対して、本論文は一石を投じている。よって本研究は、わが国のコーチング研究をリードしうる研究になり得ると評価できる。

(8) 全体構成の論理性、明快さ

本研究は、先行研究の概観、問題と目的の提示、尺度の開発、介入プログラムを行った実験、包括的プログラムを行った2つの実験、総合考察から構成されている。Figure2-1に示されているとおり、これらは合理的な構成であると考えられる。

(9) 文章表現の明快さ、わかりやすさ、段落構成の適切さ

やや冗長な記述や、即座に理解することがやや難しい表記が見受けられたが、論文を修正する中で、文章表現は以前よりも明快になり、パラグラフ・ライティングの技術も向上したと考える。

(10) 誤字・脱字・表現の不統一

当初、誤字・脱字・表現の不統一が散見されていたが、改稿を重ねたことで修正されている。

6. 最終試験の成績

本学学位規則により、最終試験として2022年12月17日に公開の場で口頭試問を行った。清水智弘氏からは論文内容に関して適切な説明が行われ、審査小委員会委員および出席者の質問に対して的確な回答がなされた。その結果、審査小委員会は最終試験の結果を合格と判断した。

7. 結論

以上により、審査小委員会は、清水智弘氏提出学位請求論文「競技場面におけるコーチング行動を改善する包括的プログラムの提案——サッカーコーチを対象にした探索的検討——」が博士論文審査基準を満たしていると評価し、清水智弘氏が博士（心理学）の学位を授与される資格を有するとの結論に達した。

以 上